

生きる力は の中で育まれる

こうベキッズビタミン I の子どもたちの記録

$$\text{I}^4 = \text{I} \cdot \text{愛} \cdot \text{EYe} \cdot \text{であ い}$$

歩いていこう Kobeといっしょに これからも……



大阪YWCAこころのケアプロジェクト

こうベキッズビタミン I

表紙写真

キャンプのテーマ「みんなの^{あい}♡でみちている」
になぞらえて、1本1本のろうそくに込められ
たひとりひとりのI（愛）が、ひとつの大きな
ハートをともしました。みんなの心と心を
つないでくれた瞬間です。

—98年11月22日ビタミンU座 ^{いらさ}

パフォーマンスキャンプ

キャンドルファイヤー

にて—



00099076140

目次

はじめに	1
1. 本事業の概要	3
2. 事業にいたる経過	
1) 震災後の子どものこころのケアへの注目	5
2) 経過の全体像	6
3. 事業報告	
1) リーダー研修	9
①ねらい ②内容 ③評価検討	
2) キャンプ	10
①ねらい ②内容 ③評価検討	
3) パフォーマンスキャンプ	11
①ねらい ②内容 ③評価検討	
4) 青年ボランティア経験交流のつどい	15
①ねらい ②内容 ③評価検討	
4. 子どもの生きる力を引き出す本事業の効果（リーダー会より）	
1) こころのケアの視点を持ったボランティア活動	19
2) 新しい青少年活動・プログラムの可能性	20
3) 青年にとってのボランティア活動の意味や効果	22
4) 地域・コミュニティに関わられたボランティア活動の可能性	23
5. 専門家の目から活動を概観する	
1) 「愛の磁場」の存在	25
2) セルフエスティームとエンパワメントへの注目	26
3) それぞれの活動や現象、人間が有機的にホリスティックに結び合わさっていること	26
4) 柔軟性と寛容性にきわめて富んでいること	27
5) パフォーマンスをとりいれたこと	27
6) リーダー養成で大切にしていること	27
7) 専門家との連携	28
8) ひとりひとりが大切にされていること	29
9) 喜びの三段階が見事に実現されていること	29
6. 資料	
1) 年表で見る活動の記録	1
2) 地図による活動の足取り	3
3) 活動写真	5
4) メンバーの声	11
5) メンバーからの修了証	20
6) 仮設の方からの感謝状	22
7) 大阪YWCAこころのケア震災4周年ボランティアフォーラム資料	23
8) 青年ボランティア経験交流のつどい小冊子	30
9) ビタミンI活動の呼びかけ	44
10) 新聞掲載記事	49
11) ビタミンIの活動に関する意識調査～アンケート調査より～	54
あとがき	125

はじめに

子どもの生きる力とエンパワメント

～「愛の磁場」の中で何が起こったのか～

生きる力とは何か？とりわけ子どもの生きる力とは何か？それはどのように育まれるのか？このことはいま多くの大人たちが関心を寄せている事である。

阪神淡路大震災という未曾有の体験の中で、子どもたちの生きる力は方向を失ってとまどい、弱まり、奪われていくようにも見えました。しかし、むしろ子どもたちは実にたくましくそれぞれの体験から学びとり、成長していきました。即ち、解決することが困難にみえた大きな課題をたくさんの仲間とともに乗り越えていくことによって、むしろ目をみはるような自己形成をはかっていったのです。

ここにその一つの体験が報告されます。大阪YWCAこころのケアプロジェクトが主催する「こうベキッズ・ビタミンI・プログラム」です。一言で言えば、阪神地域の子どもたちが、パフォーマンス（さまざまな芸）を身につけ、旅芸人さながらに仮設住宅などの高齢者を訪問する活動でした。一見単純に見えるこの活動は実に巧みな仕掛けに満ちていました。どのような仕掛けでしょうか？人間を元気づけ、勇気づけていく仕掛けでありました。困難さの中にあっても、子どもたちの生きる力は確実に育まれていくことができることをこの活動は力強く示しています。勿論、このように課題を乗り越えていくにあたっては、さまざまな環境がていねいに作り出されていったことを見落とすことはできません。

その環境の最たるものは何だったのでしょうか？

それが「愛の磁場」です。愛という言葉に抽象的、理想論的なイメージをもつ人がいるかもしれませんが。甘ったるいたわごととを感じる人もいるでしょう。しかし、我々の実践を真摯に振り返り、意味づけたとき、私たちは「愛」以上にふさわしい言葉を今だ持ち得ていません。

私たちの発見はこうです。

人間という存在には愛というエネルギーが内在化されています。人間はもともとそのようなエネルギーをもっている存在なのです。しかし人生でいろいろな意味での困難や課題に直面し、時にそのエネルギーはなくなったかのように見える時もあります。今回で言えばまさに震災という体験がそうでした。大人も子どもも含めて多くの人々が一度はそのエネルギーを失ったかにみえました。しかし、住民同志の助け合い、ボランティアとの交流、全国からのさまざまな支援などの相互作用の中で、人間の本来もっている愛のエネルギーは高められることを、さらに多くの人々が経験したのです。それは援助する側、される側といった関係を超えて双方に湧きあがるエネルギーでありました。このエネルギーが活発に相互作用している時空、それが「愛の磁場」です。互いの持てるエネルギーを引き出し合い、引き出され合うこと、その相互作用の中でエネルギーはますます大きく発揮されていきます。

さてその相互作用は実に複雑につながりあうホリスティック（全体的な関係性をもったつながり）な様相をみせています。単純で表層的な様相であれば、この報告書をつくる作業はどんなに簡単であったでしょうか。「愛の磁場」に起こっていることはあまりにも複雑なために、私たちはひとまず多様な側面のひとつひとつからその現象を書きだしました。次にそのつながりを書いてみようと思いました。これは難しい作業でした。皆様には、私たちの筆の未熟さからたくさんの行間を読み取って頂くことをお願いしなくてはなりません。しかしこ

れもまた書き手と読み手とのホリスティックな関係を作り出すよいきっかけと考えて頂けたら有難いです。

子どもたちは生まれながらに「生きる力」をもっています。子どもはまさに「いのち」そのものです。そのいのちを肯定すること、自己肯定感情（セルフエスティーム）を育てることからすべては始まります。そして愛の磁場において、エンパワメント（関係の中で力を引き出している状態）は可能になります。生きる力を考える時、セルフエスティームとエンパワメントのふたつは重要な鍵でありました。

さらに子どもたちの生きる力を考える時、大人の生きる力を考えることから始めなければなりません。大人のセルフエスティームとエンパワメントを実現していくこと抜きには子どものそれもありえないのです。

この報告書を通して、子どもたち、仮設住宅住民の方たち、リーダーたち、スタッフたちの相互関係で作り出された、「こうベキッズビタミンI」という「愛の磁場」を感じとって頂くことができたら大変幸せに思います。そしてこの「こうベキッズビタミンI」の活動が全国の子どもたちのエンパワメントになにかしら役立つことを願っています。

この活動を実施するにあたっては本当にたくさんの方々のご支援ご協力を頂きました。それもまた援助するされる関係ではなく、大変心地よい、対等なパートナーシップであったと思います。お互いが自分のために、相手のために心を尽くしている関係でもありました。そうした関係をもつことのできたおひとりおひとりを思い浮かべながら深く感謝しております。出会ってきたあなたに、あなたに、そしてあなたに。

いま神戸の地では、仮設住宅が全面撤収される方向であわただしい移動が進んでいます。復興住宅をはじめとする新たな住まいに転居していかれる住民のおひとりおひとりに幸多かれと心から願っています。

震災から5回目の春。

「地震がきても春くるもん」と歌い上げたメンバーの詩を思い出します。人間のいるところ、いのちあるところに、いつに変わらず愛のエネルギーが内在化されており、厳しい冬のあとにも花咲く春が必ずめぐってくることを信じながら。

1999年3月31日

日本YWCA

大阪YWCAこころのケア・プロジェクト

こうベキッズビタミンI

関係者の気持ちを代表して 金 香百合

(あい)

ビタミンIの命名の由来: ビタミンは人間に必要な栄養素ですが、個体内で生成できないものもあります。でも、外から取り入れることはできます。
人間に必要な「ビタミン愛」を互いに栄養補給しあうことを願って命名しました。

本事業の概要



1. 本事業の概要

本事業は平成10年度文部省「青少年交流推進事業」の委嘱を受けて、「こうベキッズ・地域復興ボランティア活動事業」として実施したものである。事業の概要は次のとおりである。

「青少年交流推進事業（国内青少年交流事業）」事業の概要

事業名	こうベキッズ・地域復興ボランティア活動事業
実施期間	1998年6月13日～1999年3月31日
事業の趣旨	震災後における子供のこころのケアを、仮設訪問・公演活動のボランティア体験によって実現する。兵庫県下の他地域から集まった子どもたちが参加して、夏休みには「出会いとつながり」を感じる野外キャンプ、秋には仮設住宅、デイサービスセンター訪問のためのパフォーマンスキャンプを行う。 こうした「子供のボランティア体験学習の効果」を全国の青少年活動リーダー達と共有することによって青少年自身もまた地域づくりの担い手であることの自覚を培っていく。
実施主体	

日本 YWCA(青年協議会) (委員長: 高橋桑子)

大阪 YWCAこころのケア・プロジェクト (委員長: 辻加代)

神戸仮設訪問ボランティア

(代表: 秋山佳子)

震災以降に仮設住宅を定期訪問しているボランティアグループである。

キッズ・ビタミンI・リーダー会

(代表: 北山祥子)

子供のこころのケアを目指してキャンプやデイ・プログラムなどを実施している。

東京 YWCA青少年活動リーダー会

(委員長: 高橋桑子)

障害児のキャンプやデイ・プログラムなどを実施する青年グループで構成されている。

実施主体以外の協力団体	大阪 YWCA教育総合研究所 (ボランティア学習の効果的実施についての助言や研修)
実施主体の事務局・連絡先	大阪 YWCAこころのケア・プロジェクト 担当: 荒川 道 〒530-0026 大阪市北区神山町11-12 TEL: 06(6361)0838 FAX06(6361)2997
本事業を実施する理由・背景	阪神淡路大震災以降、兵庫県下に住む子供のこころのケア活動を実施してきた経験から、ボランティア活動の体験学習が効果的であることがわかってきた。 仮設住宅、デイサービスセンターへの訪問・公演活動によって高齢者との異世代交流を行い、さらに子どものこころのケア問題解決に寄与することを願う。
本事業及びその成果に対する広報・普及活動の概要	・各青少年団体・関係機関への報告書の送付 ・震災関連でのこころのケアに関するネットワークでの報告会や報告書の送付 ・学校関係者への報告会の実施

事業内容／方法／参加者等	○兵庫県下の子供の「こころのケア」に取り組む。 ○参加者は、新聞を通じて公募した小・中学生 30人 ○内容…①阪神間の青年によるボランティア・リーダー会を組織する。 ②夏に、子どもの「出会いとつながりのキャンプ」を1泊2日で実施する。 兵庫県下の他地域の子ども同士あるいはリーダーとの出会いを通じて人間関係づくりをはかる。 ③秋に、子どもの「仮設住宅訪問・パフォーマンスキャンプ」を2泊3日で実施。 ダンス・伝統芸能などのパフォーマンスを練習し、仮設住宅、デイサービスセンターへの訪問・公演によって高齢者の方々との世代間交流をはかる。 ④冬に、全国各地の青少年活動のリーダーが集まり、「子どものこころのケアとボランティア活動体験の効果」についての成果を共有する。 ○方法…青少年活動リーダーのもとで、小グループによる集団生活とパフォーマンス練習や仮設等の訪問を行う。
実施期間／参加人数／実施場所	① ボランティア・リーダー研修会 1998年4月～1999年3月 【参加人数 20人】 於 大阪YWCA、西宮市立甲山教育キャンプ場（8月9日～10日） ② 出会いとつながりの夏キャンプ「甲山決戦 ー木と風と火の力をかりてみんなの力を合わせよう！ 1998年8月29日～30日（1泊2日） 【参加人数 41人】 於 西宮市立甲山教育キャンプ場 ③ 仮設住宅、デイサービスセンター訪問・パフォーマンスキャンプ「みんなの^{おい}でみちている」 1998年11月21日～23日（2泊3日） 【参加人数 57人】 於 尼崎市立青少年いこいの家／仮設しあわせの村住宅 ／宝塚市立逆瀬台デイサービスセンター ④ 青少年ボランティア経験交流の集い 「I = I・愛・Eye・であいー歩いていこう、Kobeといっしょにこれからもー」 1999年1月30日～31日（1泊2日） 【参加人数 47人】 於 国立オリンピック記念青少年センター
指導助言者	○金 香百合 [大阪YWCA教育総合研究所 所長] … ボランティア学習・子どもの自己肯定感情に詳しい教育者 ○小西 聖子 [東京医科歯科大学難治疾患研究所 助教授] … トラウマ・メンタルヘル스에詳しい精神科医 ○西澤 哲 [日本社会事業大学 助教授] … 児童虐待・カウンセリングに詳しい心理臨床家 ○岡田幸之 [東京医科歯科大学難治疾患研究所 助手] … 子どものキャンプ療法に詳しい精神科医
コメント	震災後の子どものこころのケア活動として、1995年2月より実施してきた「神戸キッズ・ビタミンⅠ」の活動を、異世代間と他地域間交流の視点から、さらに展開させる意図を持って企画したものです。 参加する被災児童の健全な育成をはかると同時に、プログラムを企画運営する青年ボランティアリーダーの社会参加を通じた自己の確立と他者への理解を目指す総合的育成事業計画です。

事業にいたる経過



2. 事業にいたる経過

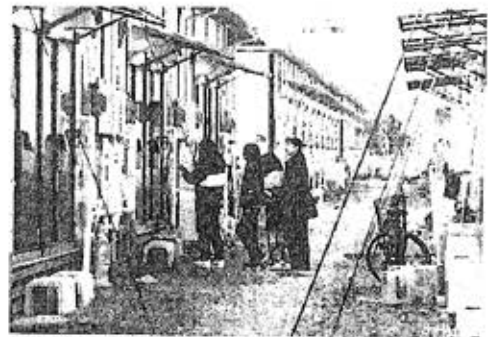
1) 震災後の子どものこころのケアへの注目

1995年1月17日未明におきた阪神淡路大震災によって、我々はそれまで経験しなかったたくさんの困難や課題、問題に直面させられた。

「こころのケア」はまさにその新たな問題提起のひとつであった。大きな災害を体験することによって、人間は有形無形の甚大な影響を受ける。それは肉体的影響にとどまらない。むしろこころに及ぼす影響は目に見えないだけに、むつかしく、困難なのである。

大阪YWCAでは、震災直後より緊急支援活動を立ち上げた。現地の実態調査に始まり、緊急物資の輸送、配給を開始し、避難道路を徒歩で行き交う被災者に湯茶サービスを実施し（被災者にとっては水さえ入手するのが困難な時期であったので喜ばれた）物資配送に伴うボランティアを送り出した。

いわばこうした肉体的物理的被害に対する支援に尽力する一方で、こころのケアに関する支援についても検討し、準備を進めていった。



そして避難所訪問活動という形をとる「こころのケア活動」が開始された。これが大阪YWCAこころのケアプロジェクトの始まりである。

この活動は、緊急災害時におけるボランティアによるこころのケア活動では日本で初めてのものとして大変注目を集める結果になった。（この経過については大阪YWCAこころのケア・プロジェクトの2冊の報告書に詳しく記載。「聴くことから始まる！」「であい つながり わかちあい」）

この避難所訪問の活動実践の中で、我々は子どもたちの状況について危機感をもつようになった。まず学校そのものが避難所になっていた。先生たちは避難所の運営に忙殺され、保護者たちもまた先行きの不安を抱えながら、今日明日の生活の建直しに奔走していた。あらゆるものが混乱のさなかにある中で、子どもたちは子どもなりにそうした状況の中に自分を適応させていこうと懸命に生きていたのである。

課題の直面とそれ乗り越えていこうとするプロセスが適切であり、柔軟性をもっているならば、その経験は成長のステップとしての意味をもつ。しかし、受けとめきれないほどの大きすぎる課題は、成長を育むどころか、むしろそれによって子どもたちを抑圧したり、押し潰していくことも起こりえる。

避難所で出会う子どもたちはうまく適応しつつある子どももおれば、適応に戸惑う子どももいたのである。この状況に対して我々ができることを検討したとき、子どものこころのケアに取り組む活動が始まった。

またここで「こころのケア」と言うとき、我々は治療としてのキュアとは一線を画して考えており、専門家にできる治療としてのキュアに踏み込もうとしたのではないことを明らかにしておく必要がある。

我々が考えたこころのケアとはディケンズいうところの人間の根源的営みとしてのケアリングである。何もできなくとも、ただただ、寄り添うこと、温かい関心と信頼をもって見守り続けること、心開いて関わり続けること、その関係性の中にこそ、人間を癒し、エンパワメントを可能にする力があると考えている。

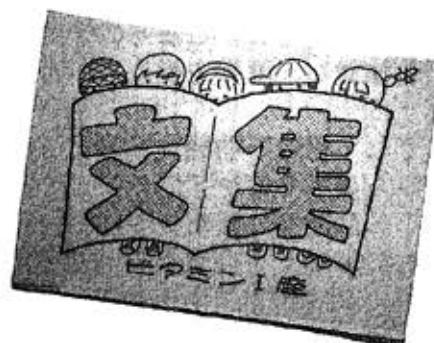
こうベキッズビタミンIプログラムでは、子どもたち同志の関係の中に、子どもとリーダーの関係の中に、子どもと地域の高齢者との関係の中に、また主催者と保護者の関係の中に、リーダー同志の関係の中に、そうしたエンパワメントの関係を有機的に紡いでいくことをねらいとした。「人は人によって癒される」人間の根源的営みとしてのケアリングを我々はそのように理解した。

さらに特筆すべきことは、関係性から個人をみただけでなく、ひとりひとりの人間の中にあるセルフエスティーム（自尊感情・自己肯定感情）にも注目したことである。

セルフエスティームとは、自分を固有の存在として大切に思う気持ちである。欠点もあり、失敗もする自分という人間を、あるがままに受け入れ、肯定的に感じ取ることのできる感情である。

個人のセルフエスティームはもともと関係性の中で育まれるものであるが、環境や心身に大きな影響を与えるような体験によって低められることが知られている。

しかも、現在の日本では、加速度的な競争社会の影響と人間関係の希薄な状況の中で、子どもたちのセルフエスティームが健全に育まれることが年々むつかしくなっている。このことは震災を体験した阪神間の子どもたちだけでなく、日本の子どもの状況としてとらえておく必要があるということを付け加えておく。



2) 経過の全体像

前述したように本事業は1995年の震災直後から開始した大阪YWCAこころのケアプロジェクトの中で、子どものための活動として実施してきたこうベキッズビタミンIの3年間の実績の上に行なわれたものである。

先の3年間の活動を含めた4年間の全活動の一覧は巻末の年表を参照して頂きたい。ここではその大筋となる部分に絞って全体像をなぞってみることとする。

1995年	1月	17日、阪神淡路大震災	
1995年	2月	神戸市福池小学校での子どもカーニバルを実施 子どものこころのケアについての公開研修会をたびたび実施	
	3月	こうベキッズビタミンIのプロジェクト立ち上げ リーダーの公募と研修開始 避難所を巡回訪問し、子どもの参加を呼び掛ける	
	4月	リーダー研修会を毎週継続的に実施	
	5月	こうベキッズビタミンIキャンプ実施	1)
	6月	キャンプの思い出会実施	
	7月	ディプログラムの実施	
	8月	こうベキッズビタミンI座第1回キャンプと公演	2)
10~12月		こうベキッズビタミンI座第2回公演	3)
1996年	1月	地震がきても春くるもん公演	4)

まず、この活動の基盤をつくることになったのは、1) のビタミンI キャンプである。このキャンプにあたっては心理や精神医学関係の専門家を加えた組織を編成した。そしてキャンプは、こどもたちの不安や感情の発散ということを目的に、野外でののびのびした生活時間と、ストレス発散のための多様なプログラムが考案された。(例: 感情発散の仮面づくり、インド舞踊、地震怪獣と神様の芝居、パペットショー(ぬいぐるみ劇)とテディベアのプレゼントなど) このキャンプには当時避難所に在住していた子どもたちの参加を呼び掛けたが、結果的には70人のうち、たった2人だけであった。

このキャンプを一番必要としている子どもたちが参加できていない背景には、保護者に子どもの問題についての配慮ができるほどに気分的な余裕がないためと感じられた。だから、比較的物理的被害の少ない家庭の子どもたちが参加していた。これは保護者に子どものことを案じるだけの気分的余裕があったためともいえる。

このキャンプのリーダーとして応募してくれた青年は100人を越えた。残念ながら全員に参加してもらうことはできなかったため、説明会を経て、15人ほどが残った。

このリーダーたちがキャンプのあとも引き続き会合を重ねて、2) のこうべキッズビタミンI 座キャンプと公演を実施した。このプログラムが本事業の方向性を決定していった。



この内容は、仲間と一緒にパフォーマンスを身につけ、その身につけた芸をもって仮設住宅の高齢者を訪問活動するというものであった。パフォーマンスの中身はダンス、手品、アフリカ太鼓、パントマイム、音楽などで、子どもに教えてくださる「達人」を発掘してきたのもリーダー自身であった。そして先のキャンプの参加者や新に新聞の公募を見た子どもたちが参加してくれた。

このプログラムの準備にあたってはリーダーの非常に積極的な働きがあった。1) のキャンプにおいてはまだ受け身的にプログラムを進めていた新人リーダーたちだったが、2) の準備においては、1) の経験を大いに活かして、自主的にプログラムを立案するまでになっており、著しい成長がみられた。

第1回のパフォーマンスキャンプの成果をもとに、その秋、キャンプではなく、日曜や祝日に通うスタイルで第2回のビタミンI 座を公募した。リーダーによるメンバー募集の努力は涙ぐましく、仮設住宅や学校、地域にビラまきに通った。1回目よりも多くの子どもたちが参加した。この時のメンバーが一番今日に至るまで継続して参加している。この冬は冬休みを活かして各地で公演をし、そのことも大きな自信となっていった。

そのハイライトになった震災1周年メモリアル公演「地震がきても春くるもん」はリーダーにとってもメンバーにとっても忘れられないものになった。リーダーにとっては、ひとつの意見の対立があった。見て頂く芸としてパフォーマンスの質を高めることをより追求するのか、あるいは子どもたちの参加や喜びに重きを置くのか。

どちらも大切であり、また必ずしも相反するものでもないのだが、この時にはこの両者のバランスが崩れかけた。一時、質の向上を強く求めようとする一部のリーダーの情熱に、子どもたちが時に緊張し、萎縮する場面もあった。そのことをリーダー会では根気強く話し合った。そして、我々はどこまでもまず子どもの参加や喜びを一番に考え、パフォーマンスの質を追求することはあくまでもその価値観の上になっただけに行なわれるものであるとの合意形成をつくりだしていった。

また多くのメンバーたちにとっても、この公演のあと中学進学や引っ越しなどを控え、別れ別れになる予感があった。公演の最中には観客の涙を誘った子どもたち自身が、公演後の修了式では涙涙の大合唱となった。



こうした経験を積み重ねる中で、我々は実践からたくさんことを学び、それを我々なりに理論化していった。まず、パフォーマンスを身につけるプロセスで子どもたちが自分の新しい可能性に挑戦することができること。またやり遂げることによって、達成感を得ることができること。また、どのパフォーマンスを選択するかということには子どもの自己決定を尊重することで、その後の練習ぶりにもよい効果が発揮されること。

実際、活動の全体を通して貰っていたのは、子どもたちに十分な情報提供を行なうこととそれをもとに子どもが自己決定することを最大限尊重することであった。さらに、リーダーによる温かい眼差し、仮設住宅の方々の温かい拍手が子どもたちにとってなによりのこのころの栄養になることを学ばされた。

リーダー自身にとってもそれは同じでメンバーやスタッフからの温かい眼差し、リーダー同志のサポートが何よりのエネルギー源となった。子どもの自己決定を尊重し、自己教育力を最大限に引き出すことで子どもたちのセルフエスティームが確実に育まれていった。

同時にそれはこの場に集い、関わった人たちにも育まれていったのである。リーダーばかり、仮設住宅の高齢者の方ばかり、保護者の方ばかり、担当スタッフばかり、スーパーバイザーばかり。

こうして方向付けができてきたビタミンⅠ座は1996年度、1997年度とその内容をさらに深めながら、仮設住宅の方々やその他の地域の方々と交流してきた。

1998年度はそうした経験を踏まえ、世代間交流と地域間交流のふたつを軸に、震災5周年目にむけてこれらの実績を一旦集大成し、広く知らしめていくことを計画した。

そのことによって、この活動の成果がいろいろな所で活かされていくであろうことを心からねがって。



事業報告



3. 事業報告

1) リーダー研修

①ねらい

よりよい青少年活動を実施していくためには継続したリーダー研修が重要である。こうベキッズビタミンⅠでもその立ち上げから、一貫してリーダー研修を大切にしてきた。(ボランティア活動における研修の大切さについては大阪YWCAこころのケアプロジェクト報告書を参照されたい)

研修は大きく分けてふたつである。ひとつはいわゆる研修会である。テーマを決め、専門家を招いたり、また自分たちで発表したりする形式をとりながら、活動に必要な学習を行なうものである。今年度は、5月に太鼓づくりワークショップ、8月に野外キャンプトレーニング、9月にLet's・パフォーマンス、10月に子どもの遊びとパフォーマンスについてと思春期の子ども理解のための研修を実施した。

もうひとつの研修はリーダー会という定期的な話し合いの場である。この話し合いはグループワークそのものであり、リーダーの自己覚知や自己開示を通して、自己理解、他者理解を深めていく時間でもある。今日の社会全般に共通する課題であるが、対人関係を不得手とする青年が多くなっており、ボランティアを志す青年層には人間関係での傷つき体験を大なり小なりもつ人も多い。こうした状況の中で定例ミーティングは一つの人間関係づくりの場であり、また癒しの場でもある必要がある。さらにリーダー自身のセルフエスティームが高められ、エンパワーしていくための場として機能していく必要がある。

そうした場をつくりだしていくために、青年活動担当スタッフにはグループワークやファシリテーターとしての相当の力量とスキルが求められるようになっていく。リーダー会がそうした場として機能しない時、活動は困難を極める。

②日時・会場・内容

- * 5月 YWCAとは? YWCAの青少年活動の意味、リーダーの役割
太鼓づくりワークショップ
バケツを使って太鼓を手作りし、演奏した。
- * 8月 野外キャンプトレーニング
夏のキャンプに向けて野外活動の技術を身につけた。
- * 9月 Let's・パフォーマンス
さまざまなパフォーマンスをリーダーが達人となって披露し、みんなが体験学習した。これはメンバー体験にもなった。
- * 10月 子どもの発達と遊び、そしてパフォーマンス
子どもの遊びやパフォーマンスが発達にどのような影響や意味があるのかを理論的に学んだ。
思春期の子ども理解
性教育の観点から、思春期の子どもの心身について理解した。
- * 12月 青年にとってボランティア活動の意味や効果について
これまでの活動をふりかえって、意味づける話し合いをした。
- * 通年 リーダー会
プログラムの企画を話し合いながら、活動全体の目的や目標についての各人の意識の明確化がはかられた。また話し合いと準備作業を通して、人間関係が築かれ、ひとりひとりのエンパワメントがはかられた。

③評価検討

今年度はパフォーマンスに関連する研修会が多くあった。しかし、これまでの研修の中で、PTSDについて、子どものこころのケアについて、対人援助者としての自己をみつめるワークショップ、生と死をみつめるワークショップ、いのちをみつめるワークショップ、グループワーク研修などが実施されてきており、その上に今年の研修があったことは見落とすことはできない。こういった自分をみつめ、人間をみつめる研修はリーダーにとっても時にしんどさや難ししさを感じるものである。時間をかけ、ゆっくりと何回も何回も繰り返しおこなわれることが効果的でもあり、必要でもある。

実際、我がリーダー会を振り返っても、この4年間のひとりひとりの成長や変化は著しい。こうした変化や成長は日々ゆっくりとしかし着実に進んでいるものだと感じる。この要因の大きなものにリーダー会という場、また子どもたちと共に過ごした場、公演での場、それぞれの体験が大きな意味をなしていることは間違いがない。

2) キャンプ

①ねらい

パフォーマンスキャンプに先立って、1) 子どもたちが自然の中でのびのびと過ごす体験をもつ、2) メンバー相互のコミュニケーションをはかること、のふたつを目的にキャンプを実施した。テーマは「木と風と火の力をかりてみんなの力を合わせよう！」

②内容

1泊2日と短い日程であったが、自然のまだまだ残っているキャンプ場でテント泊しながら、野外生活を楽しんだ。グループ活動を通して、子どもたちが話し合い、ご飯づくりから遊びまでじっくりと、自己決定した上で行動することを尊重した。プログラムのすみずみにまで、子どもたちが仲間との関係を紡ぎ、自分を他者に対して開いていくことができるように考えられた。そのためにもまず、リーダー自身が子どもたちやリーダー仲間に対して自分を開いていくことを心掛けた。

③評価検討

ビタミンⅠプログラムとしては珍しい野外活動キャンプであった。あまり深い意味を考え過ぎずにただただ自然環境の中で「普通の」キャンプをしたい、というリーダーたちの思いから始まった。これには、普段あまりにもすべてのことに意味をおき、考えることの多い活動をしていることへの反動でもあったといえる。

結果的にはこの「普通の」キャンプの中にもたくさんの意味を見いだすことになった。たとえば都会に生活する我々が便利さと引き替えにたくさんのものをうしなってきたことへの気づき。シンプルな生活の中で人間関係の豊かさや自然の恵みの大きさがかえって際立ってくる、自然が人間のこころを癒してくれることなどであった。

そして実際リーダー自身がつくったプログラム全体に、キャンプで歌う歌のひとつひとつに、キャンプファイヤーでのゲームやメッセージに、スタンプラリーの質問の隅々に深い意味が溢れていることに気づいて、それが「ビタミンらしさ」であったことをはっきりと自覚できたことはよかった。

また、もちろん子どもたちにとっては、「自然の中で生かされている自分を大切に、そして仲間を大切に」することができ、次のパフォーマンスキャンプへの期待をふくらませていくことにもつながった。

3) パフォーマンスキャンプ

①ねらい

ビタミンIの真骨頂でもあるこのキャンプは、キャンプ中にパフォーマンスの練習をし、最終日には仮設住宅などに訪問して公演会を行なうものである。

その全プロセスを通して、子どもたちが自分という大切な存在に気づき、仲間存在に気づき、地域に関わっていくことの楽しさや大切さに気づくことをねらいとしている。子どもの自己肯定感情を育み、自己の新しい可能性を発見し、達成感を得、他者への貢献を通して高次の自己実現をしていく喜びを体感することを目指されている。

もちろんこのことはリーダー自身にとっても目標であることはいうまでもない。



また保護者への働き掛けとして、説明会で保護者むけの講演会を実施することと、アンケートをとることで意識を高めて頂き協力態勢をつくっていくことをめざした。特に子どものセルフエスティームとそれを育むプロセスについて説明し、保護者にできることを具体的に例示して実践をめざした。

②内容

2泊3日のキャンプの中で芸を身につけ、最終日は宝塚市立逆瀬台デイケアセンターの高齢者の方々の前で公演会を実施した。実質的には2日間で練習し、最終日は移動と公演、修了式で終わりとなる。練習の合間にもバーベキュー大会やキャンドルファイアーなどの楽しい時間が盛り込まれている。

さて子どもたちの自己決定を尊重することは説明会から始まっている。そこでは、ダンス、南京玉すだれ、歌とハンドベル、手品、韓国太鼓(チャング)、司会進行などのパフォーマンスのミニ体験をし、自分がどの芸を練習するかを子ども自身が決める。決定したパフォーマンスごとのグループがつくられ、キャンプ中の一番たくさんの時間はその練習にあてられる。



しかし、集中力や体力の問題もあり、必ずしも猛練習が繰り返されるばかりではない。むしろリーダーにとってはそのグループの時間の中でいかに子どもの自発性を引き出しながら、楽しみながら、しかも見てもらう「芸」にしていこうという狭間で悩み苦しむ時でもある。



この悩み苦しみは対人援助者にとって非常に大切なことである。悩まず苦しまず、リーダーの思いのままに子どもたちを練習させていくな、ある意味でとても楽な時間になるだろう。そこには対人援助者が自己を見つめ、問い直すというしんどい作業がいらぬのだから。しかし我々はいつもその厳しい問い掛けを繰り返す、そのことによって成長してきたし、これからもそうしていくだろうことに自負をもっている。

プロセスをとるか、結果をとるか

そのひとつの例に、長らくの夢であった、司会進行もメンバーが担当することが今回初めて実現したことを挙げたい。ひとつひとつの芸を披露することと違って、司会進行には、全体の雰囲気を読み取ったり、出し物と出し物とをうまくつなげたり、お客さんとのコミュニケーションを上手にとったり、ちょっとしたアクシデントにもうまく対応していくことなど、非常に多岐にわたる応用力が求められる。しかも出し物の出来不出来も司会の仕方ひとつにでずいぶん印象がかわるものなのだ。そのため、これまではリーダーがその役をしてきたが今回はふたりのメンバーがチャレンジすることになった。

のんびり屋のふたりにとっては司会進行の重要性はあまりみえておらず、他のグループが懸命に練習している時間にもこれといって練習らしい練習がないようにみえた。担当リーダー自身にとっては、各グループの特徴を把握したり、全体をみわたしながらプログラムの順番を決定したりするプロセスを、1からメンバーと作り上げていっているつもりの大切な練習時間だったのだが。

けれどもそうしたプロセスは必ずしも結果にあらわれないものもある。デイケアセンターでの公演は公演場所でのリハーサルができなかったことを含めて、いろいろなアクシデントに見舞われ、進行役も時にしどろもどろになった。にも関わらず、よくやれたととるべきか、十分でなかったととるべきかリーダー会での意見は分かれた。芸の質の高さも大切だと考える者、子どもたちの自主性自発性を育むプロセスが大切だと考える者、共にゆずることのできない議論が再燃した。

この議論に時に傷つきながらも司会進行担当のリーダーは次の仮設住宅ふれあいセンターでの公演に向けて、メンバーの自宅まで出向いて打ち合わせをするなど、前向きに取り組んだ。

果たしてふれあいセンターでの公演の司会進行は2回目という落ち着きがあったにせよ、担当リーダーの思いを十分に受けとめながら共同準備してきたメンバーが見事な笑顔の中でプログラムを進めた。自分の関わり方がよかったのかどうかを常に振り返りながら、気づき、気づかされながら新たな関わり方を切り開いていくリーダーの姿をここにみる。

それは時に苦しく、つらく、痛み、泣き泣き学ぶプロセスでもあり、時にうれしく、せつなく、幸せなプロセスでもある。

リーダーへの修了証

このキャンプでの公演を終えてバスでの帰路に思いがけないことがあった。リーダーたちのまったく知らないうちに、メンバーだけで準備してきたらしいリーダーへの修了式が始まったのである。プログラムにないプログラムである。(もっとも、ビタミンではプログラムにないプログラムがよく起こるが、今回は全く予想だにしていなかったので、心底びっくりさせられた。)

子どもたちから、リーダーひとりひとりに修了証がプレゼントされたのである。手作りの手書きの修了証である。ひとりずつに文面も違う。これは、毎回のビタミンキャンプの終わりに、リーダーたちが夜を徹して書き上げるメンバーひとりひとりへの修了証と驚くほど似ていた。「愛をくれたで賞」「元気をくれたで賞」「やさしさをくれたで賞」「感動をくれたで賞」などなどリーダーひとりひとりを讃えるメンバーの言葉はどれも愛に溢れていた。

リーダーたちが子どもたちに惜しみなく与えてきたものは、このように子どもたちの中にしっかり根付き、いつしか子どもたち自身のものとなって発信されるようになっていたのである。メンバーがひとりひとりのリーダーに、名前を読み上げ、拍手喝采の中でその修了証を手渡していくあいだじゅう、リーダーたちは泣いた。ただ泣いた。喜びながら、驚きながら、感動しながら、ただただ泣いた。

そして後日、もうひとつ、私たちを泣かせたプレゼントがあった。しあわせの村仮設住宅での最終公演のあと、広いグラウンドで修了式が行なわれた。例によって手作りのお守り袋とひとりひとりを讃える言葉が子どもたちに順々に手渡されあとで、今度は先の司会進行担当のリーダーから、リーダーひとりひとりに手作りの4年間のアルバムが手渡されたのだ。

膨大な記録写真の中からその人が写っている写真をピックアップするだけでもどんなに大変な作業であっただろう。その写真を組合せ、手作りのアルバム冊子のうえにたくさんのメッセージとともにレイアウトされたセンスのよさ。20人近いリーダーがもらった生涯忘れられないプレゼントでもあった。

彼女は今回のキャンプを通してさまざまな葛藤と戦っていたが、そのエネルギーをこのようなプレゼントに昇華していったことに私はうなるほかなかった。

公演場所は仮設住宅か？ 福祉施設か？

今回の公演先を決定するまでには紆余曲折があった。これまでいくつかの仮設住宅のふれあいセンターでしてきたのだが、仮設住宅の閉鎖にむけて住民の動揺や不安があり、それに伴う自治会運営の大変さなどが表面化してきたためだ。プログラム担当リーダーが実によく現地に足を運び、住民の方々の思いを最優先する方向で協議した結果、11月には仮設住宅では行わず、代わって、宝塚市立のデイケアセンターでの公演となった。

のちに改めて仮設住宅での公演が追加決定し、12月23日には、昨年もお世話になった神戸市北区のしあわせの村仮設住宅でオプション公演が行なわれた。



仮設住宅から復興住宅への転居を含めて、神戸以外の人々には忘れられているかもしれない変化やきしみが続いている。そのことは阪神間に住んでいても見えにくくなっているのだ。

こうしたやりとりのひとつひとつの中に出会いがあり、知らなかったことを教えられることがたくさんある。そしてそれをきっかけに考えさせられることも数多くあるのだ。

ビタミンの活動においても震災へのこだわりから仮設住宅から復興住宅へと注目していくべきか、地域へのこだわりから仮設住宅に限らず、福祉施設などに広く目をむけていくべきか。あるいはさらに広い視野からみて、こうべ以外の子どもたちにも活動をひろげるべきかなどの課題を考えさせられるきっかけともなった。

言葉で伝えるもの、言葉以外で伝えるもの

ビタミンではおそらく、とても大切にしたいこと、大切に共有したいことを子どもたちに伝えるために言葉以外のものを大事にしている。リーダーひとりひとりの態度や行動、子どもたちとの関わり方やリーダー同志の関わり方の中で、ビタミンの4つのアイ（私のI、愛、やさしいまなざしのEye、であい）やモットー（元気、勇気、やる気、笑いとまごころ）を伝えていこうとしてきたといえる。（今書いていてそう思うだけであって、リーダー自身は全く無意識のうちにそのように行動していたように思う）

一方で、言葉にして伝えることも大切にできていた。朝のつどい、夕べのつどい、キャンプファイアー、キャンドルナイト、修了式などの折々に、キャンプディレクターから語られるメッセージは、短くともいつもメンバーやリーダーの心にしみわたるものであったようだ。わたしのいのちの大切さに気づき、生きることの使命に気づき、仲間の存在やそれに続くいのちの連鎖への気づきを引き出すメッセージでもあった。まさに言葉にいのちがあった。

ビタミンIのリーダーは言葉で表現することは苦手で恥ずかしいと感じる謙虚で控えめな人が多い。その朴訥としたよさと、言葉で伝えなければわからない時もあることのバランスをひとりの中で実現していくことは難しく、今後の課題でもある。

しかし、キャンプの中では、その絶妙なバランスがとれていたように思う。言葉以外で表現されているものと、言葉で表現されたものがみごとに一致し、うそいつわりがないとき、伝えたいことは本当に伝わっていくのだ。



その意味で、キャンプディレクターが語ったメッセージのひとつひとつは、リーダーたちの言葉にならない言葉を言語化したのだともいえる。

だからこそ、言葉は行動にぴったりに一致しており、またその言葉を聴くことによって、行動はますます言葉に一致していったのかもしれない。

キャンプディレクターの影響について

今回のキャンプの環境の中で、これまでのキャンプと大きく違ったことがあるとしたら、キャンプディレクターの状態であったかもしれない。4年間、一貫してディレクターを努めてきた人物の精神的、肉体的な安定度は、困難な状況乗り越えていくプロセスで、いつもリーダーたちにとっての精神的なよりどころでもあった。

それが今回、個人的な事情から今までになく心身が不安定な状態であった。これまでゆらぐことのなかった安定感から比べるとその状態は極めて異例のことであった。しかもそのことはみんなに公表されていなかったのも、逆に敏感にその状況を察したリーダーたちはディレクターのことを案じ、また不安にかられることもあったという。

こうした中でリーダー会の中の運営に微妙な波紋が広がっていったということを読み取れる。この状況すらも結果的には課題として、みんなで助け合い、乗り越えていった。

しかし、この経験から考えられることは、スタッフの影響力を小さく見過ぎてはいけないということである。今回はキャンプディレクター自身が、自分の今の状態と影響力について軽くみようとす過ぎていたといえる。

組織にあっても、誰がやっても、いつでも、同じようにできなければいけないと考える人がいるかもしれないが、人間に関わる仕事というものはそうではない。誰でもその人でなければできない役割をその時の状況の中で担っているのだ。そういう自分を常に意識化することは大切なことである。

③評価検討

前述のように、パフォーマンスの質の高さをとるのか、子どもたちの自主性や自発性によるプロセスをとるのかという議論をめぐって、このキャンプに対するリーダーたちの評価はかなり分かれた時があった。しかし、私の評価は一貫している。とてもよかった。すべてがよかった。関わったひとりひとりがその限られた条件の中で十分に力をつくしたのである。

そして、メンバーからの修了証を筆頭に、今回もまた忘れられない体験をたくさんしてきた。それらは子どもたち自身やリーダーたちを育てていく大きなエネルギー源になったことはまちがいない。

4) 青年ボランティア国際交流のつどい

①ねらい

震災を契機に始まったビタミンⅠの活動をふりかえり、この経験を他地域でボランティア活動する青年たちとの交流の中で分かち合うことをねらいとしてつどいを実施した。

②内容

集いもビタミン風に！

東京のオリンピック記念青少年センターで実施。関西からは夜行バスで上京。集いの全体構成はビタミンⅠ座の公演スタイルを真似た。初めに座長からのごあいさつ。みんなでテーマソングを歌ったり、緊張をほぐし仲間をつくるためのアイスブレイキングのゲーム。リーダーによるビタミンⅠの活動のエピソードを物語るスタンツ（寸劇）、引き続いてビタミンの4年間をまとめた感動のスライド上映。

そして小西聖子、金香百合のふたりによる「ボランティア活動を考えるシンポジウム—こうベキッズビタミンⅠの活動からみえてきたもの—」が行なわれた。

コニ・キムコンビの絶妙なやりとりの中、ビタミンⅠの活動を多様な角度から分析してみせ、あとのグループディスカッションへの有効な誘い水となった。さていよいよ、4つのテーマ別のグループタイム。（4つのテーマ：1. こころのケアの視点をもったボランティア活動 2. 新しい青少年活動・プログラムの可能性 3. 青年にとってのボランティア活動の意味や効果 4. 地域・コミュニティに関わられたボランティア活動の可能性）熱心さのあまり時間延長したその話し合いをスタンツにまとめ上げて、全体交流会でそれぞれ発表。

スタンツに対するコメントをシンポジストからもらい、ゲームや歌を楽しんで、最後の最後はキャンドルセレモニーの中で参加者ひとりひとりが自分の思いを語って、感動的にしめくくられた。

初めてのシンポジウム

ビタミンⅠのリーダーにとって、子ども対象のプログラムをつくってきたことはあっても、成人対象のプログラムを計画実施することは初めてであった。「シンポジウム」という言葉に象徴されるような、堅苦しそうなプログラムはもっとも苦手な意識があった。

そのせいもあって準備の段階はまたまたいろいろな議論百出となった。ここにきてこの集いの意義や意味がみいだせない、というものから、4つのテーマについて考えられない、自分たちに何が語れるのか、スタンツなんてつくれるのか、誰が参加してくれるのか（誰も参加してくれないのではないか）といった不安まで。

また実際、事務量も大変なものだった。案内づくり、関東と関西での宣伝、資料づくり、スライドづくり、プログラム用品のとりまとめ、往復の交通手段の手配、会場と宿泊先の手配、話し合いの中身をつくっていくこと、など。キャンプのあと一息つく間もなく、これらの作業に突入していった感がある。肉体的にも精神的にも、無理の上に無理を重ねた時期であった。にも関わらず、私たちはこの困難な課題をも乗り越えていった。

関西・関東の参加者たちからのアンケートはこの集いを準備計画してくれたことへの感謝と、参加しての喜びや感動が綴られている。参加者・主催者ともに、ここに辿り着くまでは見えなかったもの、わからなかったものが改めて明らかになってきたのだ。それぞれの地域で青少年活動をしているリーダーたちが抱える問題や体験には非常に共通するものが多く、互いに語り合うことの中で問題は随分整理され、解決の糸口さえみつかることがあるということがわかったのだ。

テーマ別のグループディスカッションでは？

関西、関東のボランティア経験をもつ青年の熱心な話し合いではこんな言葉が語られた。

1) こころのケアの視点をもったボランティア活動

- * ト라우マに問題意識をもっていたので参加した
- * 心の傷が開いてしまった状態になってしまったらどうするのだろうと心配
- * 知的ハンディキャップをもつ人にもこころのケアは必要だと感じて参加した
- * 人間関係はむづかしい。自分もうつ病に悩んでこころのケアを受ける体験をした
- * 臨床心理を学んでいたのに友人の心の病に対して何もしてあげられなかった
- * 震災を通して改めてこころのケアの視点をもつことの大切さを感じた
- * 「何をしてあげたらいいのだろうか」から「一緒につくりあげるもの」とわかった
- * 問題を抱える子どもは限られた子どもと思っていたが、実際はどの子にもおこりえるもの、ケアの必要性を感じた
- * 家では「よい子」をしながら、キャンプでやんちゃぶりをみせる子どものストレスをどう解消させてあげられるか、と悩む
- * 不登校や暴力の問題が表出して、はじめてケアが必要になるのではない。
本当は普段から日常においてケアの視点は必要だと思う
- * キャンプに参加する子はまだ愛情を受けている方だと思う。
親を亡くした子どもに実際ケアなんてできるのだろうか
- * いろんな事情で親と暮らせない子に接していると、愛情に飢え、自分のことを受け入れられていないと感じる
- * ケアというとおおげさだが、リーダーが自分でできることを把握しておくことも大切
ビタミンⅠでの学習会や活動後の毎回のふりかえりをしたのはその意味でもよかった
- * 親の心の状態によって子どもたちは状態も違っていた
- * 「自分を認めること」の大切さと思う、自己開示は1度にできるものではない
- * 知的ハンディをもつ人には自分を閉ざしがちな人も多いが、人前でハーモニカをふいて拍手をもらったことで社会に出ていくことのできた人がいた
- * 安全であたたかい方法で子どもに「私が見ている」ことを伝える必要性と思う
ビタミンのEye（眼差し）に通じるね
- * ほめられること、そして人にあげることができると大きな喜びになる
- * 自分で選んで、自分が発揮できる場、そのチャンスに出会えること、ビタミンⅠ
みたいなのっていいね
- * ケアなんていうと、研究に走ってしまう傾向があるけど、そういうことはすぐ
子どもに伝わってしまう。でも一度参加させてもらった時、ビタミンⅠにはそれを
包み込むやさしさや温かさがあると感じた
- * 何度も震災の話をする人に、いつしかはねつけていた自分がいたが、何度でも
きいてあげるべきだった
- * でも自分の中にも聴ける範囲というものがあると思う。私はもう、「それ以上
聴けない」といったことがある
- * 「つらくて、もう聴けない」と言うことで、相手に同じように痛みを感じてもら
えたと思ったことがある
- * いやー、こころのケアって奥が深いですねえ。



2) 新しい青少年活動・プログラムの可能性

- *新しい、古いつてなに？
- *新しいことを考えだすのは大変、同じことを続けるのも大変
- *子どもたちのやりたいことをさせてあげたい、その可能性は？
- *自分の中でのマンネリ化が時にある
- *メンバーの中から意見を取り入れることをするが、メンバーにもよるかもしれない
- *子どもは騒いだりするかと思えば親の前では行儀よく、どちらが本当の顔？
- *メンバー同志の間で関係ができあがっているようには思えない。関係が希薄
- *子どもを取り巻く社会が急激に変化している中でさまざまな問題がおこっている。そんな中で青少年活動も新しい着眼点や取り組みが必要になっているということではないか？
- *こころのケアという視点や、パフォーマンスを取り入れることや、ボランティア体験をとりいれることなどがそういうことかもしれない
- *また、昔からのYWCAのキャンプのやりかたのよさみたいなものも継承しながらできるといい
- *全く新しいというわけではないが、身障児のキャンプなどやりたい
- *それも以前だったら、まったくなかったのではないかな。
- そういう意味で、やはり新しいと思う



3) 青年にとってのボランティア活動の意味や効果

- *どうしてボランティアをしようと思ったか？
- *ボランティアをするというより、同じ時間を仲間と共有できることが大切。それによって得られるものが大きい
- *ボランティアをしているのか、自分が楽しんでいるのか、それ自体不明
- *子どもを見ていると自分の子ども時代をふりかえることができる
- *子どもと関わってきて、一緒に何かをやって作る活動を通して自分が楽しんでいる
- *自分が楽しいっていうのがいい、大事
- *ボランティア＝何かをしてあげるというより、みんなで楽しむこと
- *リーダーはひとりひとりの気持ちを聴くことで、キャンプを通してひとりひとりの成長や向上を考えられるきっかけになれるといいな
- *ボランティアとは「無償の奉仕活動」というより社会活動に自分から参加すること。楽しいから行っている。でも大変なことも多い。しかし嬉しそうな顔を見るとそれも吹っ飛ぶ
- *楽しいことを一緒にのびのびやりたい
- *楽しんでいるリーダーを見ているとメンバーも楽しい（「もらい笑い」現象がおこる）

4) 地域・コミュニティに開かれたボランティア活動の可能性

- * コミュニティの定義が変化して、ふたつの意味がある（例：コミュニティ心理）
 - ・ 同じ地域にすんでいる人々
 - ・ もっと広域で同じ価値観や共通の趣味をもっている人々
- * 農村と都市部など、場所によってはコミュニティといってもイメージが全然違う
- * 都市型では好きなもので付き合っていけば良い
- * 農村部では地域に密着した活動をしていこうとする雰囲気がある
- * 子ども会活動も親がいやがって役員をしたくない人がふえている
- * 大阪の堺でのだんじりまつりの例から
 - ・ まつりにはヤンキーの若者たちも参加し真剣にだんじりを曳く。連帯感やまつ心さわぐ雰囲気のなかでアイデンティティが育てられる気がする
- * うちでは、小学生までは喜んで参加するが、中学高校生は出てこない
- * 中学生には自分でやっているという雰囲気が重要だ
- * セルフエスティームについても注目するといいい関わりのヒントが得られるだろう
- * ひとり者でも地域で生きていける社会、同性愛者でもシングルでも受け入れられく社会であってほしいと思う
- * 地域に人が集まれる環境も大切、仮設住宅でのふれあいセンターの意義は大きい
- * ハードとソフトの両方の条件に注目したい
- * マンションでまつりの運営を呼び掛けたひとがおり、その呼び掛けにこたえて一緒にやりだす人がおり、周辺地域まで一緒にまつりをするようになった。働きかける人と応える人がいて成り立つ
- * ビタミンIでは子どもたちが同じ地域の中にあっても、接点の少ない仮設住宅に訪問することで神戸の街の復興を担う一員であるというアイデンティティの形成にも効果があった
- * 自分の生まれた街に愛着をもてるってしあわせなことだ
- * 2001年から始まる総合学習でも学校を地域に開いていくことがいわれている子どもと地域とをつないでいくことがますます重要でかつ難しい時代だ
- * ビタミンIの着眼点のすばらしさは、子どものエネルギーを地域に還元していく仕組みをつくったことではないか、しかもそのことで子どもたちのセルフエスティームは高まり、子ども自身もエンパワーしていつている

③評価検討

この集いを企画実施することによって、リーダーのこれまでとはまた違う新たな力が引き出され合った。また、大変ではあったが、この準備のプロセスで、自分たちの活動をふりかえり、スライドやビデオ、スタンプ、配布資料といったものにまとめていく作業をしたことによって、改めてそのすばらしさに気づくことができ、感慨新たであった。

集いの当日にそれらを用いて興味深い報告をすることができ、参加者の高い評価も得て、達成感があった。

青年同志の関係をつくっていくことにも新たなチャレンジがあった。



さらに、メインの課題でもあった経験交流はグループディスカッションを中心に、プラムの端々で深められ、参加者それぞれの今後の活動にむけてエネルギーを養った。

子供の生きる力を 引き出す本事業の効果

...リーダー会より...



4. 子どもの生きる力を引き出す本事業の効果(リーダー会より)

これまでの活動から見てきたもののポイントを絞ると、次の4点が明らかになった。

- 1) 「こころのケア」の視点を持ったボランティア活動
- 2) 新しい青少年活動・プログラムの可能性。
- 3) 青少年にとってのボランティア活動の意味や効果
- 4) 地域・コミュニティに開かれたボランティア活動の可能性

「青年ボランティア経験交流の集い」において、これらのテーマ別に話し合いを持ち、その発言は事業報告の項に紹介したとおりである。

ここでは、準備の段階でビタミンIのリーダー会、及びリーダー研修会で話し合われたものを要約した。

確かに専門家による我々の活動の分析も、客観的な資料としては重要だ。しかし、実際に活動に関わってきたリーダーが、どのように捉えていたのか、そして、どの様な思いで関わっていたのかを読み取ることができる。

1) 「こころのケア」の視点をもったボランティア活動

1. ビタミンIの活動は「こころのケア」の視点をもっているのか？



①ビタミンIでは本当に精神的に病んでいる子どもではなく、震災の影響をあまり受けていない子どもへの働きかけ。

②震災直後のキャンプの際に、避難所にまわってビラを配ったが、避難所や、仮設からの参加者は少なかった。

↓

親に余裕がないと子どもがキャンプに参加できない。

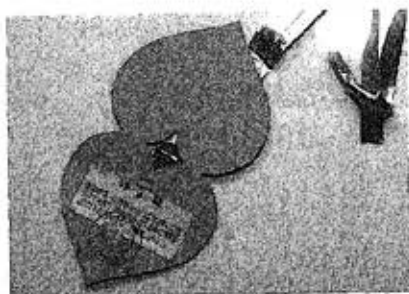
③震災直後は震災によるストレスも多く、それを意識してプログラムを実践してきた。
それは時と共に変化してきた。

④現在は、精神病患者ではない子どもも、多くのストレスを感じている。
それに対する「こころのケア」(震災直後に関わったボランティアは身体を健康にすることに重点が置かれていた。)

2. ビタミンIでいう「こころのケア」とは？

①「こころのケア」という言葉のとらえ方で、素人にそんなことができるのかという反感を買うことがある。

②「こころのケア」という言葉を使うことによって、住民が病人扱いされているように感じてしまうという弊害があった。
(E X. 仮設訪問にて)



③ビタミンIでの「こころのケア」は「よりそう」という意味合いが強い。

④「ケア」と「キュア」の違い。

⑤素人だからできる、対等な関係の中にあるケア
↓
リーダーの受容によって、子どもの精神の安定が得られる＝ビタミン的「こころのケア」

3. 「こころのケア」は相互作用である。

メンバーだけ元気になって、リーダーが元気でなくなる（疲れてしまう）プログラムは、「こころのケア」ができていない。相互作用でお互いに元気になっていく。

2) 新しい青少年活動・プログラムの可能性

古いプログラムとは？

1. 子ども会活動—昭和30年代より盛んになる。目的は地域ぐるみの非行防止活動。

2. CAMP活動—YWCA、YMCA、ボーイスカウト、ガールスカウトなどによって行われた。目的は野外活動で自然と親しみ、仲間づくりをすること。
子どもが勝手に遊ぶプログラムではない。



ビタミンのどんな所が新しいプログラムなのか？

1. パフォーマンスを取り入れる。

①自己表現をし、人に披露することで、喜びを得る。
E X. 山ちゃん（ダンスの時生き生き）

②隠された才能を発見し、それにより自信がつく。

↑
学校ではできない体験

2. 手作りにこだわり、励ましのメッセージを送る。E X. 修了証

↓
メンバーからの年賀状や修了証は手作りで、
リーダーが書いたようなものと同じ言葉で励ましてくれる。



3. リーダーの関わり方が全面的受容型。

↓
学校とは違う。

①メンバーが将来ビタミンIのリーダーの様なリーダーになりたいと言う。

↑
受容されている実感。

新しい子どももなじみやすい。

↓
リピーターが多い。

4. ルールが少ない。

①長いグループタイム

↓
学校生活と違って、タイトな時間ではない。

②子どもの自己決定権を保証している。

↓
日常では自分で決定することが少なくなっている中、初めは「～していい？」と許可を求めるメンバーも、自分で何をするか、どんなルールですか、決められる様になる。



5. 地域とのつながりを持つ。

↓
人とのつながりが薄い現代社会

①人とつながることを実践できる。（自分、リーダー、地域の人）

②仮設住宅に行き、子どもがピラを配る。（地域の人と関わる手段）

青年にとってのボランティア活動の意味や効果

ボランティアの意義

1. 学びの場

* 社会（視野）が広がる。新しい体験ができる。←自発的、能動的だからこそ。

2. つながりの場

- * 様々な年齢、境遇、価値観の人たちとの出会い。
- * コミュニケーションを学べる。
- * 人の痛みが分かるようになる。

3. 振返りの場

- * 自分への自信がつく。＝「自分にもできることがある」と認識できる。
- * 日常から離脱できる。

4. 変化の場

- * 自分のボランティアに対するイメージが変化する。＝GIVE & TAKE の関係を理解できる
- * 身近な人のボランティアへの意識が変化する。（参加しやすくなるかもしれない。）

自分のボランティア活動について

1. 活動する前感じたこと＝偏見があった。

2. 活動してから感じたこと

- ① ボランティア活動をしている事を人には言わない。

↑
大した事をしていないのに、偉い事をしていると言われたくない。

- ② 楽しいからやっている。やりたい人がやりたいことをやっている。
（EX. 学生サークル）

- ③ 心に今まで感じた事のない温かいものを感じる。（継続する理由）

- ④ 未だ自分の事しか考えられず、はずかしい。

- ⑤ たまには振り返りも必要。

4. ビタミンIで活動する意味＝震災ボランティアとしての意味

- ① 地震の被災体験が強烈

↓
神戸の人に何かしよう。

- ② 色々なことを受け容れられるようになった。

- ③ 地震の事を大阪の人には語れなかったが、ビタミンIでは語れるようになった。

地域・コミュニティに開かれたボランティア活動の可能性

子どもと地域

現在の子どもは地域とつながることが難しい状況にある。

(E X. 保育園でも、安全面から地元の老人ホームとの交流ができない。←実施の困難さ)



そんな中でビタミンⅠ座の活動は、子どもにチャンスを与え、きっかけ作りができる。

地域とは何か

「地域」—共通する人たちの土地、時に縛られることもある。

「コミュニティー」—共通の関心や、ニーズを持った人たちの集まり。地域より幅広い。



ある意味でビタミンⅠの活動もコミュニティーに当てはまる。

ふれあいセンター



ボランティア自身と地域との関係—ビタミンⅠの場合

1. 兵庫出身者

- * 地域には関わっていないが、アイデンティティーはある。E X. 芦屋っ子、神戸っ子
- * 体育館に避難していた際、地元の人と関わらなかった。
- * 自分の地域はとても狭い。

2. 大阪出身者

- * 自宅から少し離れた場所でも違和感がある。
- * 自分の地域はとても狭い。

3. 自分の出身地と関係ないところに住んでいる人

- * 単身で住む=どこのコミュニティーにも属さない。



自宅・もしくは会社だけしかコミュニティーになり得ない人の増加。

- * 職場が、実家がコミュニティー?
- * 結婚、子育てがコミュニティーにつながるきっかけになる様に感じる。
- * 地域とコミュニティーは別



コミュニティーに属しても、地域とつながらない空白はうめられない。

被災地の人にとって地域とはどこか

この話題の背景

1月に行われた「青年ボランティア経験交流の集い」に、ビタミンIでは「歩いていこ Kobe」といっしょに「これからも…」というテーマを付けた。

これを決めるまでに、リーダー間で、被災地と大阪との温度差について疑問点があり、ビタミンIが東京でこのテーマを主張できるのか、何度も話し合いが持たれた。

結局、現在も神戸は復興途中にあり、そのことを忘れないで欲しいと言う気持ちで、うまに取り入れることになった。この結論には兵庫県出身のリーダーの意見が大きく影響している。大阪出身のリーダーにはためらいがある。

1. 兵庫県出身者の意見

* 同じ兵庫県内でも地震の被害で判断。

「無意識（自分の中ではっきりしない）に区別する」

* 大阪は違う。震災のことを考えてくれる。（気を使ってくれるのは嬉しい）

2. 大阪出身者の意見

* 被災地の人「来てくれてありがとう。」という言葉。→迷惑ではないか不安になる

3. 被災者についての洞察

地震の被害が大きかったところは地域のつながりが濃かったところ。

↓

仮設でのコミュニティの再生・援助「ふれあいセンター」

↓

困難—高齢者は若い人よりつながるのが難しい。

専門家の目から 活動を概観する



5. 専門家の目から活動を概観する

この活動の最初から最後まで関わったひとりの者として、今こうして活動の概観を書かせて頂くことをとても光栄に思い、また感謝している。さて、ビタミンIの活動を特徴づけるものをいくつかに絞ってみるとこうなる。

1) 「愛の磁場」の存在

くはじめに>にもあるように、愛という言葉は時に甘っちょろく、理想論的で、抽象的な空論に感じる人もあるかもしれない。しかし、人間の肉眼で見ることができないからといって誰がその存在を否定することができようか。

もとより、人間の肉眼に見えないため存在していることがわからなかった空気や引力といったものも、いまや科学的にその存在が証明されている。後世に愛というものの存在が科学的に証明される時がくるかもしれないことを誰が否定できるだろう。(といっても私にとってはそれが証明されようがされまいが重要なことではない)



とにかく、ビタミンIの活動を振り返ったとき、それが愛というエネルギーの働く磁場で行なわれていたことを知る必要がある。愛されていることを実感することによってエネルギーを取り入れ、自分を好きになることによってエネルギーを内在化し、愛することによってエネルギーを放出する。

この愛のエネルギーの循環によって、生きているものはますます楽しく、心を躍動させていくことになる。

この磁場を最初に意識的につくっていくのはファシリテーターでもあるキャンプディレクターの役割だ。キャンプディレクターは自ら愛され、愛することの関わりの中で、この愛の磁場をつくっていく。この磁場があって、次の項にある個人のセルフエスティームとエンパワメントが実現していく。

おそらく、この愛の磁場はこころのケアの実践にとっては不可欠のものである。しかし、それにとどまらず、今日の家庭、学校をはじめとし、人間の存在するところに必ず必要なものである。むしろその磁場がなくなってしまったので、今日の子どもを取り巻く問題が起こっているようにも思える。

子どもたちは愛されていると実感できなくなり、愛するということを表現できなくなっていく。
それは大人の状況にほかならない。



2) セルフエスティームとエンパワメントへの注目

個々人の中での愛のエネルギーを考える時、セルフエスティーム（自己肯定感情）はその根幹をなすものである。人間のこころがあたためられている状態といえようか。認められたり、関心を寄せられたり、温かくみつめられたり、あるがままを受容されることによって、人間のこころはあたためられる。セルフエスティームが高まっている状態である。

この状態では自己開示（自分自身について心開いて語ること）が容易になってくる。そしてまた、人が語るものについても心開いて聴こうとすることがおこる。エネルギーを放出したり、取り入れたりする「人との相互作用」が可能になっている状態だ。

エンパワメントは力を引き出している状態をいうが、これは引き出されている状態でもあり、相互作用の中で起こるものである。セルフエスティームが高まり、安心と信頼の関係の中で、相互作用しあって自己表現をしたり、行動したりできることはエンパワメントしている状態である。

この状態を子どもたち同志の中で、子どもとリーダーの関係の中で、リーダー同志の関係の中で、仮設住宅住民の方と子どもたちの中で、住民の方とリーダーの中で、リーダーとスタッフの関係の中で作り出し、紡ぎ合っていたのである。



3) それぞれの活動や現象、人間が有機的にホリスティックに

結び合わさっていること

ビタミンIでは、現象的に起こることがすべてつながり、関わりあっているというホリスティックな価値観が大切にされていた。子どもたちは神戸の街の状況の影響を受け、保護者の心理的状況の影響を受けている。リーダーたちもまた子どもたちの影響を受け、元気にもなり、落ち込みもした。高齢者の方々は子どもの笑顔になごみ、その学校名を聴くほどになつかけにうなづいておられた。

時と空間を共有している我々がつながっていることはもちろんのこととして、時空を超えてなお我々はいのちの営みという連鎖の中にいる自分をみつめていた。

震災で親を亡くすなどして一番傷つき、ビタミンIのような場を最も必要としていて、子どもたちに私たちは参加してほしかったが、してもらうことはできなかった。

しかし、私たちはいつも語っていたのだ。今のビタミンのメンバーが、彼らの人生の中で、きっとその子どもたちに出会っていくだろう。関わりをもっていくだろう。彼らは同時代を生きていく子どもたちなのだ。その時、時空を超えて、私たちの愛はきっとメンバーひとりひとりのいのちを通して届けられていくに違いないと。

また、リーダーたちが仮設住宅の自治会の方々と心開いた関係を普段からもとりつづけてきており、どんなに信頼して頂いていたかは、案外知られていないだけにぜひ付け加えておきたい。

4) 柔軟性と寛容性にきわめて富んでいること

ビタミンⅠの活動は常に柔軟性と寛容性にきわめて富んでいた。それは団体としてのYWCAの特徴でもある。組織が権威的で、硬直化しているところのような活動は実現しなかっただろう。しかし、その組織をつくっているのもまた、一人一人の人間であることからいえば、ここに集った人たちの柔軟性と寛容性が鍵であったといえる。

5) パフォーマンスをとりいれたこと

自己表現の手段としてのパフォーマンスを青少年活動の中にうまく取り入れていることはビタミンⅠの特徴だ。もちろん従来の青少年の文化活動の中にはこうしたパフォーマンスにもっと長期間をかけて取り組み、より質の高いものをめざしたものもある。

しかし、ビタミンでは質の高さの追求ではなく、子どもの主体性や参加の喜びにより重きをおいた。そして限られた時間の中である程度マスターでき、そのパフォーマンスが観客となる人々にも喜んでもらえるものを考慮した。子どもたちが小さな自信でよいから、確実に自分のものにしていくように配慮した。



長年参加してきた子どもたちの中には、そうした小さな自信を積み重ねて、「自他への信頼」を着実に育てている様子が見える。

6) リーダー養成で大切にしていること

青少年活動におけるリーダー養成の重要性は昔からいわれ続けている。しかも年々難しくなっている。理由のひとつは青年たちに多様な人間関係の経験が少なくなっていることである。そのためにリーダー同志の人間関係をつくることや、グループリーダーになったときに子どもたちとの人間関係をつくることにつまづきやすくなる。



リーダー養成にあっては、人間関係をつくることを体験学習しながらすすめることが大切だ。またリーダー自身のセルフエスティームとエンパワメントに注目することは絶対に必要である。

近年の特徴として、ボランティア活動を志す青年には特にセルフエスティームが低いために、自己評価が厳しくなりすぎる人が多く、結果として過度の緊張や萎縮や思い込みが生じやすい。その状態のままでは、状況を適切に読み取り、判断することも難しくなる。

ビタミンⅠでは、まず、リーダーひとりひとりが自分の価値に気づき、内在化されているたくさんの可能性に気づくことをこころがけた。そのためには自分を好きになるワークショップなども有効である。しかし、それらの研修にはすべてのリーダーが参加できたわけではなかった。そのため、一番有効に機能したのはリーダー会でのすべてのプロセスと、活動直後の振り返りミーティングである。

特に振り返りミーティングは疲れていても必ずその日のうちに実施し、リーダーたちのディブリーフィング（ちょっとした吐き出し）の効果があつた。さらに活動を振り返る時に、厳しすぎる自己評価になりやすいリーダーたちに、適切なスーパーバイズ（専門的助言）を提供することで自己の思い込みやゆがみに気づき、安心と自信をもって帰宅できるという意味があつた。

その点からいうと、今回のパフォーマンスキャンプでは初めて、その日のうちに振り返りミーティングをしなかった。

肉体的に疲れ切っていたせいではあるが、後になってリーダー同志の行き違いがあつたことを思うと、多少の無理をしてでも、あの日のうちに振り返りをしておくほうがよかったと思う。



7) 専門家との連携

大阪YWCAこころのケアプロジェクトでは、避難所訪問活動を立ち上げた時から専門家にスーパーバイザーとして関わって頂いたので、引き続いて立ち上げたビタミンⅠでも専門家を含んだ組織編成を行なった。

もともとYWCAにはユースワーカー兼ボランティアコーディネーターという専門スタッフがいたが、それに加えて、外部から心理臨床家や精神科医の協力を頂いたことによって支援態勢はかなり充実していたといえる。こうした専門家の存在によって、子どもをサポートすること、リーダーをサポートすること、スタッフをサポートすることに複合的な効果があつた。

今回の青年ボランティアの経験交流のつどいでのシンポジウムもそうであるが、率直で親しみのある開かれた関係がそこにはあつた。

さまざまなリーダー研修会や振り返りミーティング、キャンプにおいて、専門家という權威ぶった上下の関係でなく、むしろ対等なパートナーシップを築き上げていくことができた。

この相互作用の中で双方に成長や発見のある関係をつくれた。真に「共育者」であろうとした教育者たちであつたといえる。

キャンプで自ら1日ばかりで地震おぼけをつくり、神様に扮してその弔いをしたのは他ならぬスーパーバイザーであつた。そのように、ひとりの仲間として参加し、心から楽しむことのできる開かれた専門家であつたからこそ、ますますその存在は効果的であつた。

その点、いわゆる専門家然とした人では、このような活動の中ではあまり効果的な働きはできないであろう。専門家のパーソナリティもまたそれほど大切なのである。今回、得難い方々に恵まれたことに心から感謝する。

8) ひとりひとりが大切にされていること

ビタミンⅠの活動では本当にひとりひとりが大切にされていることを実感する。メンバーは勿論、リーダーも、スタッフも、スーパーバイザーも。仮設住宅の住民の方に対しても、他のボランティアグループの人たちに対しても。相手の立場にたって考えるということをつも心がけていたといえる。

また人間の存在に対して、肯定的なメッセージを送ることもビタミンⅠの中でいつのまにか身につけてきたものである。人間は大切にされてきたように、自分も人を大切にすることである。

この端的な例がメンバーからリーダーへの修了証であろう。メンバーたちが毎回楽しみにして受け取っていたという修了証は、リーダーがひとりひとりのメンバーに対して心をこめて書くものだ。キャンプ最終日の前夜はこれを完成させるために深夜に及ぶ作業となる。キャンプ中にあった出来事や体験からその子に最もふさわしい言葉を選びとりながら書き上げるのだ。

今回、メンバーたちがリーダーたちに全く気づかれぬようにキャンプの夜に書き上げた修了証は、突然の思いがけないプレゼントであった。そしてそれは内容から手渡し方まで、いつもリーダーたちがメンバーにしていたのとそっくりであった。

このように、相手を思いやり、真心を届けようとする行動は、自分自身が大切にされる中で身にしみついてしまっていたのだ。

仮設住宅での公演の際に住民の方々のために、いつも何かしら子どもたちとリーダーとで手土産を手作りで準備する中にもあらわれている。



市販のものを買うと楽ではあるが、ビタミンⅠでは手作りのものを大切にする価値観がしっかりと根付いていた。そのため、ますます準備は大変になるのだが、そのことをいとわないリーダーたちであった。

9) 喜びの三段階が見事に実現されていること

文部省主催の報告会で専門家の助言の中で頂いたお褒めの言葉によると「ビタミンⅠの活動には喜びの三段階が見事に実現されている。」ということであった。その喜びの三段階とは、もらう喜び、できる喜び、あげる喜びである。

「もらう喜び」では子どもたちはまず、リーダーたちからたっぷりの愛をもらう。練習を通して、それ以外のたくさんの関わりを通して、子どもたちに注がれる眼差しは温かい。

そしてまた、仮設住宅の高齢者の方々からもたくさんの愛を頂いている。公演での大きな拍手、失敗しても大きな応援が寄せられ、温かい感謝の言葉やお手紙、お礼状。

どれもこれも子どもたちが「もらう喜び」を十分に満喫できる機会となっている。ところでもらう喜びとは、生まれてきた時から神様にもらってきた愛にその起源を発している。

もらっている愛に気づき、それを受けいれることができる時、人からもらうこともまたできるようになる。すべてのことを、すべてのものを感謝しつつ、しっかりともらうこと、これはできそうで簡単にできることではない。

「できる喜び」はいうまでもなく、パフォーマンスを練習によって自分のものにしていく中で獲得されている。そしてできるようになっていくプロセスをグループの仲間やリーダーと共に過ごしていることも見逃せない。自分だけで、自分だけができるようになるのではない。自分もでき、仲間もできるようになり、私たちみんなができるようになるプロセスだ。メンバー同志の中で教えたり、教えられたりする大切なプロセスだ。

もちろん、はじめから上手にこの関係をつくられるわけではない。子どもたちのこれまでの日常生活の中で、友達と比べられ評価されることが多過ぎるので、このように心底対等な友人関係をつくるのが難しくなっている。

ビタミンIでは、褒めるときも、認めるときも、勇気づけるときも、人と比べるような言葉やそれによって点数づけるような言動はほとんどない。

その人ひとりひとりを大切な固有な存在としてみているからだ。

ナンバーワンではなくオンリーワンの存在としての子どもたちをみているのだ。



「あげる喜び」はいつもキャンプの終わりにたくさんあらわれる。仮設住宅のふれあいセンターでビタミンIの公演を行う時がそのひとつのハイライトである。

練習したパフォーマンスを披露して、観客の笑顔と拍手に包まれる晴れ舞台でもある。この瞬間はすでに「あげる喜び」だけでなく、「もらう喜び」、「できる喜び」のどれをも満喫している時でもある。

すべては関係の中におこり、すべてが相乗効果となって引き出しあっている。

しかし、パフォーマンスのように何かをして、はじめて他者に「してあげること」ができるのではない。むしろ、なにもしなくとも、ただ「いる」だけで、ただただそこにいるだけで、もうすでに「してあげている」のだと思う。子どもたちがいる、そのことだけで喜ぶことのできるリーダーたちがいる。仮設住宅の方々もおそらくそうだろう。自分たちのことを忘れずにいてくれる子どもたちが「いる」。



いること、存在していること、それはやがて、目の前に存在することだけでなく、リーダーや住民の方々の方々の心の中に存在することまでを含んでいる。

そう、時空を超えて存在すること、そのこと自体が、関係の中ですでに何かをして「あげて」いることなのだ。

すでにそういう存在である人間が、「あげる喜び」をもう少しだけ自覚する瞬間が、こうして実際に何かをして「あげる」時なのだろう。

喜びの三段階を子どもたちに起こっていることから読み解いてみた。しかし、すでにお気付きのように、このことはリーダーたちの中に起こっており、高齢者の方々の中に起こっており、関わってくださったすべての方々の中に起こっていたことなのである。

喜びはモノではない。これほどモノに溢れた現代社会の中であって、ビタミンの活動の中でやりとりされたもの、あげたりもらったりしたものは何一つ高価なモノはない。どれもこれも見栄えは既製品のようにパツとしないかもしれない手作りのもの。



あるいは目に見えることもなく、手でさわることもできないようなものばかりだ。

しかし、それらは確かに存在し、あたたかく、やわらかかった。

我々に寄り添い、こころを温め、こころをやさしく包み込み、こころを癒すものであったのだ。

これを説明しようとするとき、今の我々は「愛」以上にふさわしい言葉をもっていない。そしてこの相互作用の働く時空はまさに「愛の磁場」といえるだろう。

まだまだ書ききれないたくさんのことがある。たとえば「いのちをみつめる」キャンプのこと。そのためのリーダー研修として「生と死をを考えるワークショップ」も実施した。このプロセスの中にもたくさんの報告すべきことがあるように思える。

また、親と子の双方のリラクゼーションと癒しをめざして行なった「親子キャンプ」のこと。そこには従来のキャンプにないたくさんの工夫があった。親のためのグループやそのグループカウンセラーをおき、親のためのワークショップやリラックスタイムを導入して、どれも効果をあげた。

この経験からは今の時代の「親子関係づくり」にキャンププログラムが貢献できる可能性がはっきりとみえてきた。

今、2001年からの総合学習の導入にむけて学校現場ではさまざまな研修や準備が進んでいるが、ビタミンⅠの活動実践はまさに地域に開かれた総合的な学習としてたくさんの示唆を残している。

ビタミンⅠの活動実践を総合学習としての視点から分析すること、「心の教育」として分析すること、「ボランティア学習」として分析することなど、今後に残された課題である。

スーパーバイザー
金 香百合